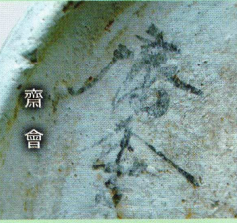
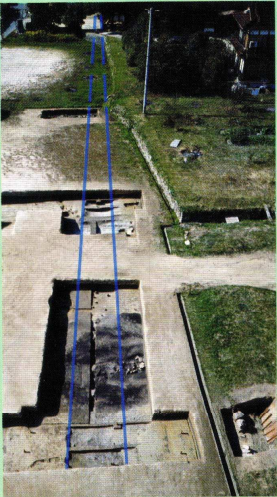


井戸
井戸跡
僧房と国師院の間に造られた井戸です。一边が約 1.2 m の木組みの井戸で、四隅に丸太を打ち込み、横板を渡しています。この井戸の中から「国院」という墨書きのある須恵器が出土しています。



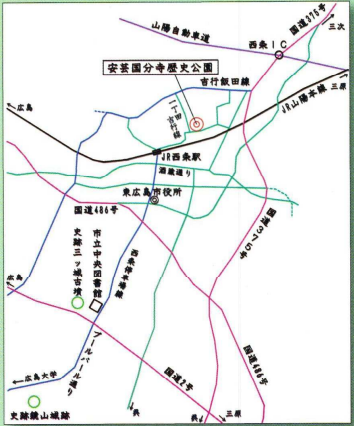
木簡の出土した土坑 (ゴミ捨て穴)
寺の東側を区画する築地近くに大量の木簡(荷札)や木屑、割れた土器や瓦が埋められた穴が見つかりました。この付近は地下水位が高いため、木製品が腐らずに保存されたようです。
木簡には、天平勝宝 2(750)年の年号が記され、目(国司の四等官の 4 位)あてに何かを四斗送ったことが記されています。また、一緒に出土した須恵器には「安居」や「齋会」といった宗教行事を示す用語が墨書きされています。国分寺造立の詔が出たのち、なかなか造立が進まなかったため朝廷はたびたび督促をしています。安芸国分寺では、詔が出て 9 年後には主要伽藍が完成し、宗教行事が行われていたことが推察されます。



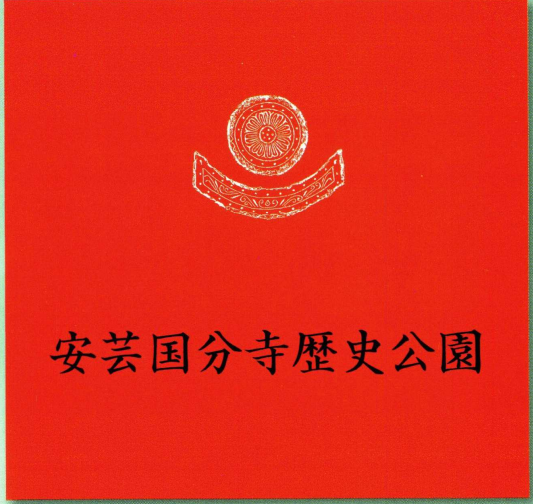
南側の区画溝
東西方向に延びる幅約 1.8~2.4 m の溝です。写真は、寺の中心線から東側の部分で、約 60 m にわたり確認されています。寺の中心線から西側の延長線上でも同様の溝が確認されており、寺の南側築地の側溝であった可能性があります。

築地
築地は、寺の東側と西側で確認されています。
築地は、幅 2 m の築地基壇を中心に、その両側の幅約 1 m の犬走り状テラスとその外側の幅 2 m 前後の内溝と外溝で構成されています。
この築地の中心で東西の距離を測ると、約 255 m でした。南北については明確になっていませんが、ほぼ同規模であったと思われます。

安芸国分寺歴史公園の位置図



■問合せ先
東広島市教育委員会生涯学習部文化課 Tel 082-420-0977 (直通)
※安芸国分寺歴史公園は、文化財の保護と活用を目的に整備した公園です。ご利用に当たってはボール遊びやラジコン等の危険な遊び、火気の使用など公園利用者や周辺に住む人たちの迷惑になる行為はしないでください。
また、公園西側、市道一丁目吉行線沿いに駐車場を設けています。(大型 2 台、普通車 20 台)
公園利用の際にはこちらの駐車場をご利用ください。



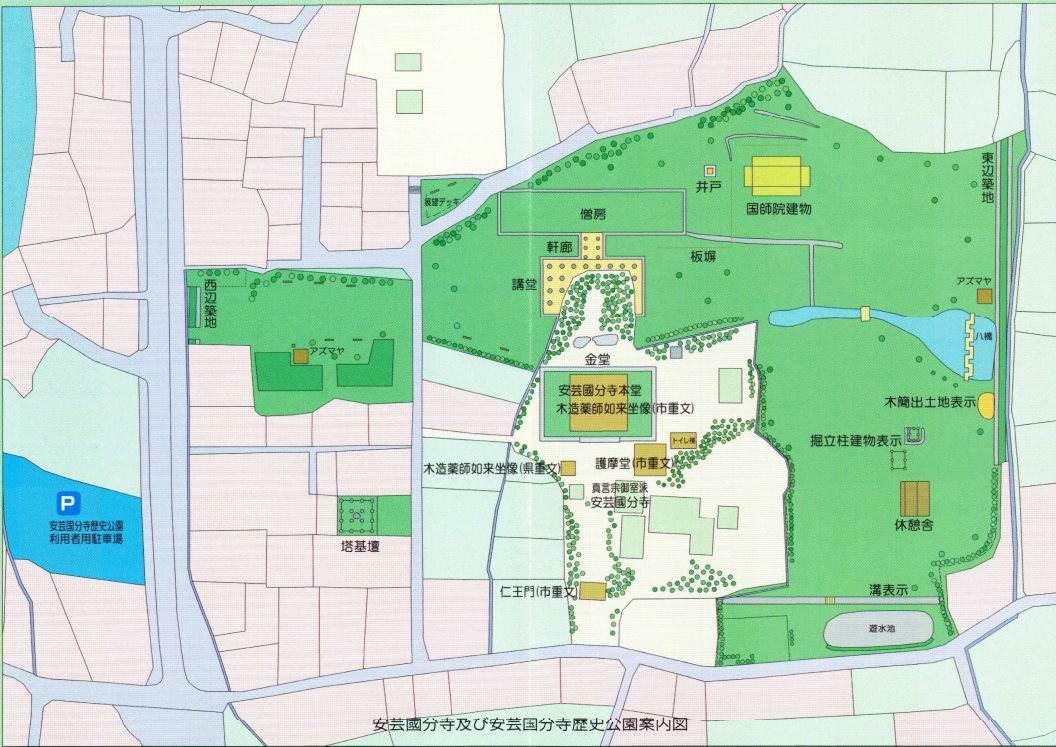
僧房及び講堂復元基壇 (西から)

東広島市教育委員会

■安芸国分寺について
奈良時代、聖武天皇は疫病と飢饉や反乱などによる国土の荒廃を憂い、国家の鎮護を祈念する目的で、天平 13(741)年 2 月 14 日、諸国に国分二寺(僧寺・尼寺)の建立を命じました。僧寺は「金光明四天王護国寺」、尼寺は「法華滅罪之寺」が正式な名称です。
安芸国では、西条盆地の北縁の東広島市西条町吉行字伽藍に国分寺が造営されました。国分尼寺の位置は明らかではありませんが、国分僧寺の東側(字尼寺)一帯にあったと考えられています。
江戸末期に編纂された芸藩通志には、国分寺縁起が収録されていて、それによれば「当寺は 31 代用明天皇の太子、優婆塞圓通が御開基の地なり」とあるため、国分寺建立以前に建てられていた寺院を転用して国分寺としたとする説もありましたが、これまでの発掘調査では前身寺院の遺構は確認されていません。
伽藍は南から金堂、講堂、僧房が一直線に並ぶ東大寺式の伽藍配置で、塔は伽藍中心線より西側に造られています。中門と南門の位置が未確定であることや北側築地が確認されていないため、寺域の南北規模は不明ですが、東と西の築地は確認されていて、東西約 255 m の規模であったことがわかっています。
国分寺造立の命が下ったのち、諸国で国分寺の造営が始まりますが、造営ははかどらず、天平勝宝 8(756)年 5 月に聖武天皇が亡くなった直後に、造立の進捗状況を確認するため都から諸国に使いが派遣されています。しかし、その状況は芳しくなく、6 月には聖武天皇の一周忌に向けて仏像と金堂を完成させるよう命令が出されています。
安芸国分寺では、天平勝宝 2(750)年 4 月 29 日銘のある木簡をはじめ、多量の木簡とともに「安居」「齋会」といった墨書きのある須恵器や瓦、土器が 1 つの土坑(ゴミ捨て穴)から出土していて、同時期に投棄されたものと考えれば、毎年 4 月 15 日からの安居(夏季の修行)が天平勝宝 2 年頃には安芸国分寺で行われたことになり、金堂などの主要建築物ができあがっていたと考えられます。天平勝宝 8(756)年 6 月に工事を急がせる命が下り、同 12 月には安芸国を含む 26 カ国に仏具が配布されていますが、この 26 カ国はその段階で国分寺の造営がかなり進んでいたグループだったと考えられます。
また、文献上では奈良時代に都から各国に派遣された僧官である「国師」がいたことはわかっていましたが、その国師は各国のどこを拠点としていたかわからずではありませんでした。安芸国分寺の調査では、その拠点となる国師院(国師の事務所)が国分寺の寺域内に置かれていたことを全国で初めて突き止めています。

■安芸国分寺歴史公園について
安芸国分寺は、昭和 11 年に塔跡が国史跡に指定され、昭和 57 年に主要伽藍部分が、平成 7 年に西側部分が追加指定され現在に至っています。史跡を保存するとともに、悠久の時の流れに想いを寄せ、先人たちの技や文化を追体験できる歴史学習の場として、また、市民の憩いの場とするため、平成 11 年度から平成 24 年度まで 15 年かけて安芸国分寺歴史公園を整備しました。
公園内に復元された講堂基壇や僧房基壇などの遺構は、発掘調査によって明らかになった国分寺創建の頃の様子を示しています。

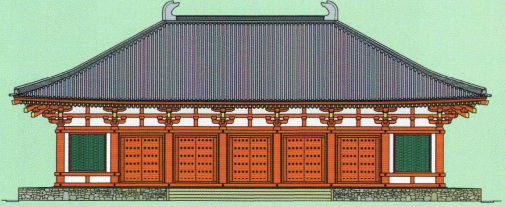
■所在地 東広島市西条町吉行字伽藍
指定面積 30,861.69m²
指定年月日 昭和 11 年 9 月 3 日
追加指定 昭和 52 年 6 月 29 日(「史跡安芸国分寺塔跡」から名称変更)
平成 14 年 3 月 19 日(指定範囲追加)



安芸国分寺及び安芸国分寺歴史公園案内図

金堂

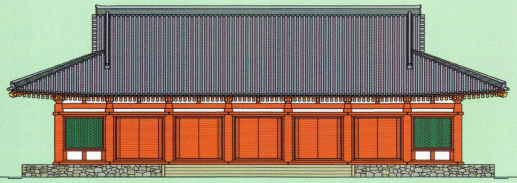
金堂は、本尊仏を安置した建物で、国分寺で最も重要な堂宇の1つです。基壇は、早い時期に削られたようで、ほとんど残っていませんでしたが、発掘調査により、雨落ちと考えられる溝や、建築用の作業用の足場を組んだ時の穴などが検出され東西約33m、南北約22mの基壇であったことが推定されました。この基壇上に、正面7間、奥行4間の寄棟造本瓦葺の建物が建っていたようです。



金堂想像図

講堂

講堂は、僧侶が集まり経典や法会（法要）の作法を学ぶ建物です。基壇外装は自然石積で、基壇内では数か所で礎石が確認されています。基壇の規模は東西約31m、南北17mで、その周りには雨落溝がめぐってました。基壇上には、正面7間、奥行4間の入母屋造本瓦葺の建物が建っていたようです。



講堂想像図



僧房

僧房想像図

僧侶が寝起きした寄宿舎に当たる建物です。東西55m、南北13mの長細い基壇上に、屋内が細かく区切られた切妻造板葺の建物が建てられていました。講堂から僧房へは、幅約6m長さ約8mの軒廊と呼ばれる屋根付きの渡り廊下でつながっていました。



講堂跡・軒廊跡調査状況（北から）

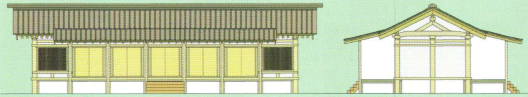


国師院建物跡（南から）

国師院建物

国師は奈良時代に都から各国に派遣された僧官で、各国の僧侶の指導・育成や法会（法要）の執行をしていました。文献では早くからその存在が知られていましたが、発掘調査で、「国師」「国師院」「国院」などの墨書土器が出土し、国分寺の寺域内に国師の事務所（国師院）が置かれていた事が明らかになったのは、安芸国分寺が初めてです。

国師は、平安時代になると「講師」と呼び方が変わりますが、安芸国分寺では、国師院の北東40mのところで「講院」などの墨書きのある土器とともに平安期の建物跡を検出して、「講師院」と推定されています。



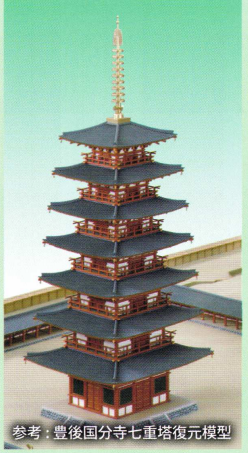
国師院建物想像図



国分寺塔跡

塔

聖武天皇の玉齒が埋められているという伝承があった塚を、昭和7年に発掘調査したところ、心礎をはじめとした塔の礎石が発見され、ここに国分寺があったことが明らかとなりました。



参考：豊後国分寺七重塔復元模型

塔の基壇は約16m四方、高さ約1mで、一部で版築が確認されています。基壇上の約9m四方の範囲に礎石が並んでいます。国分寺では七重の塔を建てることが決まられていましたが、地方によっては五重塔であったりしてまちまちだったようです。安芸国分寺の場合は、礎石規模からみると七重塔を建てるにはやや小さな規模ですが、工学的には建築は可能な大きさです。

塔は、平安時代末期頃に火災に遭い、西側に倒壊して、大量の瓦が地中に埋まっています。火災の後、塔は再建されず、土砂で埋められ、高さ3mほどの塚となっていました。塔跡では多数の瓦が使われ、破損のたびに差し替えも行われていたため、年代の異なる瓦が同時期に屋根ののっていたようです。



国分寺塔跡出土瓦